

令和2年度第3回伊賀地域高等学校活性化推進協議会

配 付 資 料

- 令和2年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会委員名簿・・・・・・・・・・ P 1
- 【資料1】 令和2年度第2回伊賀地域高等学校活性化推進協議会
の概要・・・・・・・・ P 2
- 【資料2】 伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況(令和2年3月卒)・・ P 4
- 【資料3】 県内中学校から通信制高校への進学状況・・・・・・・・・・ P 5
- 【資料4】 伊賀地域の県立高校(全日制)の令和元年度卒業生
の進路状況・・・・・・・・ P 6
- 【資料5①】 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)・・・・ P 7
- 【資料5②】 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)
【北部・南部別】・・・・・・・・ P 8
- 【資料5③】 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)
【北部・南部別】 グラフ・・・・・・・・ P 9
- 【資料6】 中央教育審議会での主な意見と当協議会での協議の概要・・ P 10
- 第3回協議会において協議していただきたい論点・・・・・・・・・・ P 15

令和2年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿

区 分	所 属 等	氏 名		
1	学識経験者 (1名)	三重大学大学院 地域イノベーション学研究科 准教授	かとう たかや 加藤 貴也	継続
2	有識者 (4名)	上野都市ガス株式会社 取締役業務部長	にし がき ひろ なお 西 垣 浩 尚	継続
3		中外医薬生産株式会社 取締役管理本部長	おか もり ひさ よし 岡 森 久 剛	継続
4		亀井商事	なか たに ゆき お 中 谷 幸 雄	継続
5		有限会社テレマーク	さくら い かつ いち 櫻 井 勝 一	継続
6	P T A 関係者 (5名)	伊賀市P T A連合会 会長 (伊賀市立大山田中学校P T A)	にし おか ひろ し 西 岡 浩 司	R2新
7		名張市P T A連合会 会長 (名張市立箕曲小学校P T A)	ふじ はら しん や 藤 原 真 也	R2新
8		伊賀地区県立学校P T A協議会 会長 (上野高等学校P T A会長)	まつ もと まさ たか 松 本 誠 太	R2新
9		伊賀市内県立学校P T A 代表 (あけぼの学園高等学校P T A会長)	て ほ えつ こ 手 穂 悦 子	R2新
10		名張市内県立学校P T A 代表 (名張青峰高等学校P T A会長)	あお やま ひろ ひさ 青 山 浩 久	R2新
11	市教委教育長 (2名)	伊賀市教育委員会 教育長	たに ぐち しゅう いち 谷 口 修 一	継続
12		名張市教育委員会 教育長	にし やま よし かず 西 山 嘉 一	R2新
13	小中学校長代表 (2名)	伊賀市小中学校長会 代表 (伊賀市立崇広中学校 校長)	ます だ ひろし 増 田 博	継続
14		名張市小中学校長会 代表 (名張市立桔梗が丘中学校 校長)	にし やま しょう ご 西 山 尚 吾	継続
15	教員代表 (2名)	小中学校教員 代表 (名張市立北中学校 教諭)	はま だ ひろ ゆき 濱 田 博 之	継続
16		高等学校教員 代表 (伊賀白鳳高等学校 教諭)	おお た まさ ゆき 太 田 昌 幸	R2新
17	県立学校長代表 (3名)	名張高等学校 校長	なか やま たか ゆき 中 山 隆 之	継続
18		伊賀白鳳高等学校 校長	とく だ よし み 徳 田 嘉 美	継続
19		名張青峰高等学校 校長	あか つか ひさ お 赤 塚 久 生	R2新

計 19名

令和2年度第2回伊賀地域高等学校活性化推進協議会の概要

- 1 日時 令和2年10月29日(木)19時00分から21時20分まで
- 2 場所 三重県伊賀庁舎7階 大会議室
- 3 概要

地域の中学生の状況や県立高校の特色、中学校卒業生数の減少の推移予測を共有し、地域の子どもたちにつけさせたい力、県立高校のあり方、県立高校の活性化について協議しました。

主な意見は次のとおりです。

《子どもたちに育みたい力をつけるための教育について》

- 総合学科の名張高校、あけぼの学園高校の両校は、地域との接点を多く持った活動を進めており、地域社会に開かれた教育環境づくりに成功している。
- 総合学科は、地域をフィールドとした学習が強みであり、子どもたちは試行錯誤をしながら生きる力をつけている。あわせて、子どもたちが将来の生活の場を自分で選択する力を身につけることに役立っている。

《地域における県立高等学校のあり方について》

- 数年前の協議会において昼間定時制について議論したが、当時は当地域にはニーズがないと結論づけられた。再び、中学校の現場において昼間定時制の必要性が高まっているということは、子どもたち自身や彼らを取りまく状況が大きく変化している可能性があり、改めて議論する必要がある。
- この地域にも不登校傾向の子どもたちは増加しており、彼らの中には、週のうちの何日かの通学や、1日の中でも数時間登校するような就学形態を希望する子どもが多くいる。このような子どもたちの多くは、対人関係に不安を感じており、程よい人間関係の中だからこそ学習できたり、全日制高校と重ならない時間帯のほうが安心して通学できたりすることから、現在は、奈良県立山辺高校山添分校の昼間定時制や上野高校または名張高校の定時制に進学していることが多い。昼間定時制の高校が伊賀地域にあれば、域外へ通学することなく地元で力をつけて高校を卒業し地域社会に出ることができる。
- 以前は、定時制は働きながら夜間に学ぶ場であったが、現在は働きながら学んでいる生徒はごく少数である。
- 子どもたちが地元の高校に通学することで、物理的な時間を生み出すことができ、より部活動に打ち込んだりすることができる。また、地元を学び場とすることで、将来的に地元での就職や活躍につながる可能性が高まる。
- 教育の質や選択肢に差が生まれないようにすべきであるが、生徒減に伴って教職員数や学校数が減ることは避けられないことも事実であることから、より良い学習環境を検討するにあたっては、現実的な折り合いをどうつけるのかを意識しながら進めることが大切だ。
- 少子化が進行する中であっても学校運営の効率だけを求めて学習環境の整備をするべきではない。
- 子どもたち一人ひとりが自分の特性に応じた学びができるよう、地域にいろいろな

選択肢を置いておくことが大切である。当地域の高校はそれぞれに特色や魅力を持って教育活動を進めているので、できるだけ維持されることが望ましいが、やむを得ず再編が必要となれば、学びの選択肢をどう引き継ぎ整理していくのかを議論しなければならない。

- 通学の事情や本人の学力によっては、複数の学校から進学先を選択できるような状況にない子どもたちもすでに存在する。高校に進学したい子どもたちが必ず進学できる環境づくりをしてほしい。
- 伊賀市では交通事情の影響もあり80%以上の中学生が地域内の高校へ進学していることから、地域内の県立高校の配置については最大限の配慮を望む。
- 名張青峰高校は、通学にバスを利用する生徒が多くいる。バス停の込み具合や、バスの本数の減少などを考えると、スクールバスの運行など何らかの手を打つ必要があるのではないか。
- 35人学級は、生徒一人ひとりに目が行き届き、生徒のニーズにきめ細かく対応することができることから教育効果は高い。一方、教員の負担増の課題もあることから、学校現場の努力だけでなく行政の施策にも期待したい。
- 学科・コースを維持するために1学級あたりの定員を40人以下にしたとしても、全体の生徒数の減少やそれに伴う教員数の減少などの課題が考えられる。少子化が進行する中、子どもたちの選択肢を確保する際には、それらの課題も考えながら議論する必要がある。
- 学校規模が小さくなり教員定数が減少することで部活動の顧問の配置が今までどおり行えずに、廃部を検討せざるを得なくなる部が生まれることが懸念される。
- 中学校長の聞き取りの内容をふまえると、伊賀、名張両市の状況や考え方は必ずしも一致していないように思う。両市それぞれにおいて、県立高校のあり方を検討してみてもよいのではないか。
- 地域の県立高校は、地域に貢献する人材の育成、世界を視野に入れ活躍する人材の育成など、それぞれの役割を担って教育活動を進めており、これらの選択肢を少しでも多く維持するためには、伊賀、名張両市合わせた伊賀地域全体で県立高校のあり方を考えるべきである。そのためにも、通学などの環境をより改善していく必要がある。
- 地域内外への就職、進学状況など、高校卒業後の進路状況についての資料を共有してほしい。

《活性化に向けた方策について》

- 地域外から伊賀地域の県立高校への進学者が増えるように、学校の魅力化を進めることが大切である。行きたいと思う学びや部活動が学校にあれば、通学の利便性に関わらず子どもたちは目指すと思う。
- 地域の県立高校はそれぞれの特色を活かしながら学校の魅力化に取り組んでおり、伊賀白鳳高校には部活動に魅力を感じて他地域からも一定数の入学者がいる。子どもたちが地域の学校に通学しやすくなる環境整備が図られることで、学校の特色化・魅力化をより進めることができると感じている。
- 学校の活性化について、在校している生徒から意見を聞いてみるのもよいのではないか。

伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況（令和2年3月卒）

資料2

区分	進路先	伊賀市		名張市		伊賀地域合計	
		人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
伊賀地域 県立 全日制	上野	173	23.5	91	14.2	264	19.2
	伊賀白鳳	214	29.1	38	5.9	252	18.3
	あけぼの学園	50	6.8	17	2.6	67	4.9
	名張	51	6.9	94	14.6	145	10.5
	名張青峰	83	11.3	167	26.0	250	18.2
	小計	571	77.7	407	63.4	978	71.0
他地域 県立 全日制	津	3	0.4	45	7.0	48	3.5
	津西	10	1.4	17	2.6	27	2.0
	上記以外 ※1	44	6.0	30	4.7	74	5.4
	小計	57	7.8	92	14.3	149	10.8
私立 全日制	鈴鹿	1	0.1	0	0.0	1	0.1
	高田	2	0.3	3	0.5	5	0.4
	三重	2	0.3	15	2.3	17	1.2
	桜丘（日生第一）	1	0.1	4	0.6	5	0.4
	上記以外 ※2	4	0.5	5	0.8	9	0.7
	小計	10	1.4	27	4.2	37	2.7
県外 全日制	国公立	6	0.8	4	0.6	10	0.7
	私立	22	3.0	29	4.5	51	3.7
	小計	28	3.8	33	5.1	61	4.4
県立 定時制 通信制	上野（定）	5	0.7	0	0.0	5	0.4
	名張（定）	2	0.3	8	1.2	10	0.7
	上記以外	3	0.4	0	0.0	3	0.2
	小計	10	1.4	8	1.2	18	1.3
県外公立 定時制 通信制	山辺高校山添分校	5	0.7	2	0.3	7	0.5
	上記以外	1	0.1	0	0.0	1	0.1
	小計	6	0.8	2	0.3	8	0.6
私立 定時制 通信制 (広域, 県外 含む)	英心(通)	1	0.1	19	3.0	20	1.5
	徳風(通)	4	0.5	2	0.3	6	0.4
	上記以外 ※3	10	1.4	17	2.6	27	2.0
	小計	15	2.0	38	5.9	53	3.8
高等専門 学校	鈴鹿高専	5	0.7	1	0.2	6	0.4
	鳥羽商船	1	0.1	1	0.2	2	0.1
	近大高専	13	1.8	21	3.3	34	2.5
	県外高専	1	0.1	3	0.5	4	0.3
	小計	20	2.7	26	4.0	46	3.3
特別支援 学校	伊賀つばさ学園	2	0.3	3	0.5	5	0.4
	特別支援聖母の家	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	県外特別支援	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	小計	2	0.3	3	0.5	5	0.4
その他	就職	3	0.4	2	0.3	5	0.4
	上記以外 ※4	13	1.8	4	0.6	17	1.2
	小計	16	2.2	6	0.9	22	1.6
公立中学校卒業者数		735	100.0	642	100.0	1,377	100.0

- ※1 桑名1、桑名西1、四日市3、四日市西1、四日市四郷1、四日市工業1、
四日市中央工業4、四日市商業2、飯野2、白子3、稲生1、亀山13、津商業5、
津東4、津工業5、久居3、久居農林2、白山6、松阪4、松阪工業3、飯南1、
相可3、昴学園4、宇治山田商業1の計74人
- ※2 海星3、皇學館5、伊勢学園1の計9人
- ※3 県内（定・通）2、県外（定・通）25の計27人
- ※4 専修・各種学校・職業訓練校等7、他（進学待機・求職中・無業等）10の計17人

県内中学校から通信制高校への進学状況

		県立	私立	県外	計	
H28.3 卒	県全体	31	296	212	539	
	伊賀地域	伊賀市	0	12	7	19
		名張市	0	18	8	26
		計	0	30	15	45
H29.3 卒	県全体	43	306	214	563	
	伊賀地域	伊賀市	0	9	6	15
		名張市	0	18	7	25
		計	0	27	13	40
H30.3 卒	県全体	44	296	273	613	
	伊賀地域	伊賀市	0	3	8	11
		名張市	0	12	18	30
		計	0	15	26	41
H31.3 卒	県全体	56	336	289	681	
	伊賀地域	伊賀市	2	8	12	22
		名張市	0	14	11	25
		計	2	22	23	47
R2.3 卒	県全体	65	333	316	714	
	伊賀地域	伊賀市	2	6	9	17
		名張市	0	22	15	37
		計	2	28	24	54

※ 伊賀市は、私立中学校（桜丘）を含まない

伊賀地域の県立高校（全日制）の令和元年度卒業生の進路状況

(人)

上野高校					名張高校				
進路先	地域内	県内	県外	計	進路先	地域内	県内	県外	計
4年制大学 (大学校含む)		26	207	233	4年制大学 (大学校含む)		5	35	40
短期大学 (高専含む)		2	7	9	短期大学 (高専含む)		6	12	18
専修・各種学校 等	2	2	10	14	専修・各種学校 等	8	4	51	63
就職	1	1	1	3	就職	58		6	64
その他 (進学待機を含む)	17		1	18	その他 (進学待機を含む)	8			8
卒業生数計	20	31	226	277	卒業生数計	74	15	104	193
あけぼの学園高校					名張青峰高校				
進路先	地域内	県内	県外	計	進路先	地域内	県内	県外	計
4年制大学 (大学校含む)			6	6	4年制大学 (大学校含む)		17	153	170
短期大学 (高専含む)		1	1	2	短期大学 (高専含む)		3	16	19
専修・各種学校 等		3	7	10	専修・各種学校 等	15	4	63	82
就職	24	8	17	49	就職	12	2	2	16
その他 (進学待機を含む)		1		1	その他 (進学待機を含む)	9	3	2	14
卒業生数計	24	13	31	68	卒業生数計	36	29	236	301
伊賀白鳳高校					伊賀地域全体				
進路先	地域内	県内	県外	計	進路先	地域内	県内	県外	計
4年制大学 (大学校含む)		5	16	21	4年制大学 (大学校含む)	0	53	417	470
短期大学 (高専含む)		1	14	15	短期大学 (高専含む)	0	13	50	63
専修・各種学校 等	2	11	36	49	専修・各種学校 等	27	24	167	218
就職	137	5	29	171	就職	232	16	55	303
その他 (進学待機を含む)	2			2	その他 (進学待機を含む)	36	4	3	43
卒業生数計	141	22	95	258	卒業生数計	295	110	692	1097

伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)

資料5①

令和2年5月1日 教育政策課調べ

中学校卒業年月	H 29.3 卒業	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 現中3	R 4.3 現中2	R 5.3 現中1	R 6.3 現小6	R 7.3 現小5	R 8.3 現小4	R 9.3 現小3	R 10.3 現小2	R 11.3 現小1
伊賀市	841	829	829	807	768	788	738	740	689	685	701	665	642
卒業生数													
前年度対比		-12	0	-22	-39	20	-50	2	-51	-4	16	-36	-23
R2.3対比					-39	-19	-69	-67	-118	-122	-106	-142	-165
①公立小中在籍者数	(761)	(748)	(743)	(735)	723	736	712	751	697	697	713	676	652
②私立小中在籍者数	(80)	(81)	(86)	(72)	40	26	16						
名張市	689	720	674	642	657	648	636	645	673	642	648	638	615
卒業生数													
前年度対比		31	-46	-32	15	-9	-12	9	28	-31	6	-10	-23
R2.3対比					15	6	-6	3	31	0	6	-4	-27
伊賀地域計	1,530	1,549	1,503	1,449	1,425	1,436	1,374	1,385	1,362	1,327	1,349	1,303	1,257
卒業生数													
前年度対比		19	-46	-54	-24	11	-62	11	-23	-35	22	-46	-46
R2.3対比					-24	-13	-75	-64	-87	-122	-100	-146	-192
①②③小中在籍者数					1,418	1,411	1,365	1,425	1,397	1,365	1,393	1,342	1,293

伊賀地域県立高校の1学年学級数	29	29	28	27	27								
() 内は入学定員の計	(1,160)	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)								

(参考)

県内合計	H 29.3 卒業	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 現中3	R 4.3 現中2	R 5.3 現中1	R 6.3 現小6	R 7.3 現小5	R 8.3 現小4	R 9.3 現小3	R 10.3 現小2	R 11.3 現小1
卒業生数	17,513	17,458	16,811	16,489	15,781	16,211	16,020	15,890	15,582	15,434	15,254	14,729	14,363
前年度対比		-55	-647	-322	-708	430	-191	-130	-308	-148	-180	-525	-366
R2.3対比					-708	-278	-469	-599	-907	-1,055	-1,235	-1,760	-2,126
小中在籍者数					15,774	16,172	16,006	16,024	15,720	15,569	15,409	14,878	14,479

伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)【北部・南部別】

資料5②

令和2年5月1日 教育政策課調べ

中学校卒業年月	H 29.3 卒業	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 現中3	R 4.3 現中2	R 5.3 現中1	R 6.3 現小6	R 7.3 現小5	R 8.3 現小4	R 9.3 現小3	R 10.3 現小2	R 11.3 現小1
伊賀北部													
卒業生数	758	749	761	747	706	727	679	684	611	626	638	605	588
前年度対比		-9	12	-14	-41	21	-48	5	-73	15	12	-33	-17
R2.3対比					-41	-20	-68	-63	-136	-121	-109	-142	-159
①公立小中在籍者数	(678)	(668)	(675)	(675)	661	675	652	693	616	635	648	614	594
②私立小中在籍者数	(80)	(81)	(86)	(72)	40	26	16						
伊賀南部													
卒業生数	772	800	742	702	719	709	696	701	751	701	710	698	669
前年度対比		28	-58	-40	17	-10	-13	5	50	-50	9	-12	-29
R2.3対比					17	7	-6	-1	49	-1	8	-4	-33
③公立小中在籍者数					717	710	697	732	781	730	745	728	699
伊賀地域計													
卒業生数	1,530	1,549	1,503	1,449	1,425	1,436	1,375	1,385	1,362	1,327	1,348	1,303	1,257
前年度対比		19	-46	-54	-24	11	-61	10	-23	-35	21	-45	-46
R2.3対比					-24	-13	-74	-64	-87	-122	-101	-146	-192
①②③小中在籍者数					1,418	1,411	1,365	1,425	1,397	1,365	1,393	1,342	1,293

伊賀地域県立高校の1学年学級数	29	29	28	27	27								
() 内は入学定員の計	(1,160)	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)								

※ 伊賀北部=伊賀市から旧青山町を除く。

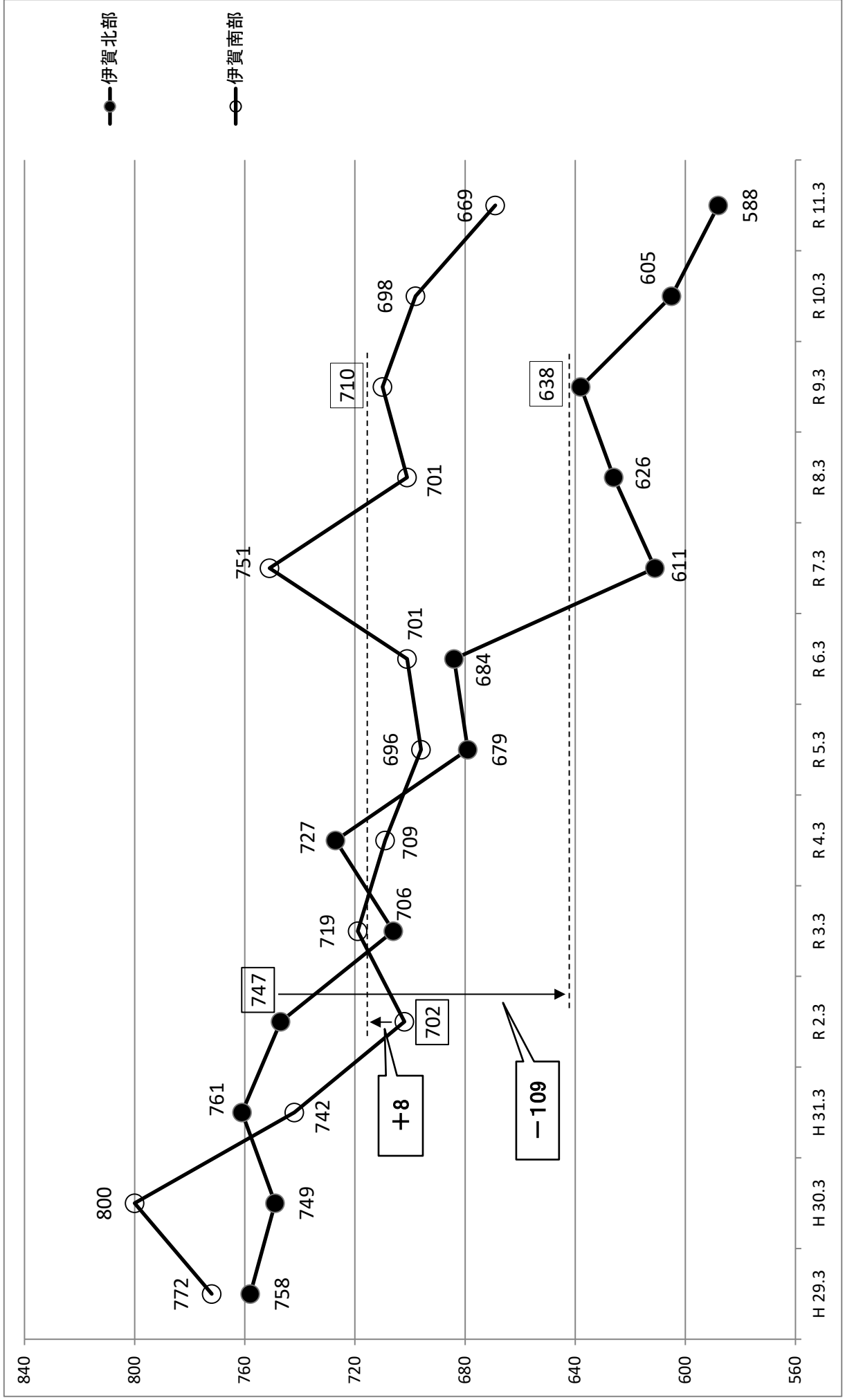
※ 伊賀南部=名張市に旧青山町を加える。

(参考)

伊賀地域県立高校の1学年学級数	29	29	28	27	27								
() 内は入学定員の計	(1,160)	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)								
伊賀北部=伊賀市から旧青山町を除く。													
伊賀南部=名張市に旧青山町を加える。													
県内合計													
卒業生数	17,513	17,458	16,811	16,489	15,781	16,211	16,020	15,890	15,582	15,434	15,254	14,729	14,363
前年度対比		-55	-647	-322	-708	430	-191	-130	-308	-148	-180	-525	-366
R2.3対比					-708	-278	-469	-599	-907	-1,055	-1,235	-1,760	-2,126
小中学校在籍者数					15,774	16,172	16,006	16,024	15,720	15,569	15,409	14,878	14,479

伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)【北部・南部別】グラフ

資料5③



中央教育審議会での主な意見と当協議会での協議の概要**1 子どもたちに育みたい力をつけるための教育について****【中央教育審議会の意見より】**

- 急激に変化する時代の中で、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。
- 中央教育審議会では、社会の変化にいかに対処していくかという受け身の観点に立つのであれば難しい時代になる可能性を指摘したうえで、変化を前向きに受け止め、社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにする必要性等を指摘した。次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力としては、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力などが挙げられた。
- 豊かな情操や規範意識、自他の生命の尊重、自己肯定感・自己有用感、他者への思いやり、対面でのコミュニケーションを通じて人間関係を築く力、困難を乗り越え、ものごとを成し遂げる力、公共の精神の育成等を図るとともに、子供の頃から各教育段階に応じて体力の向上、健康の確保を図ることなどは、どのような時代であっても変わらず重要である。

【協議会で出された主な意見】

- 社会は、自分で考え自分で行動する力や、他者に思いを伝え周囲を巻き込み自分の考えを実現する力を求めている。子どもたちには、もっと積極的に地域に出ることで、失敗を恐れずチャレンジする経験をしてほしい。(H30・第2回)
- 変化しつづける社会に対応し自分で考え行動する人材が求められている。(R2・第1回)
- 外国の子どもたちと比較すると、プレゼンテーション能力やPRする力の向上が必要であると感じる。(R2・第1回)
- 「自立する力」と「共生する力」が大切であると感じており、課題を解決する力や情報を活用する力、コミュニケーション力を育む教育を進めたい。(R2・第1回)
- 社会の変化や身近な課題を自分事として捉えることが重要だ。学校での学習にとどまらず、地域社会にも関心を持ってもらいたい。(R2・第1回)
- 総合学科は、地域をフィールドとした学習が強みであり、子どもたちは試行錯誤をしながら生きる力をつけている。あわせて、子どもたちが将来の生活の場を自分で選択する力を身につけることに役立っている。(R2・第2回)

2 地域における県立高等学校のあり方について

【中央教育審議会の意見より】

- 高等学校教育が実現を目指す学びの姿
「多様な生徒の興味・関心や特性、背景を踏まえて、特色・魅力ある教育活動が行われるとともに、特別な支援が必要な生徒に対する個別支援が充実しており、また、地方公共団体、企業、高等教育機関、国際機関、NPO 等と連携・協働することによって地域・社会の抱える課題の解決に向けた学びが学校内外で行われ、生徒が自立した学習者として自己の将来のイメージを持ち、高い学習意欲を持って学びに向かっている。」
- 普通教育を主とする学科として、普通科に加えて、例えば、
 - ・SDGs の実現や Society5.0 における現代的な諸課題への対応を図るために学際科学的な学びに重点的に取り組む学科
 - ・地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために、地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに重点的に取り組む学科
 - ・その他普通教育として求められる教育内容であって特色・魅力ある教育を実現すると認められる学科を各設置者の判断により設置できるようにすることが求められる
- 職業教育を主とする学科を置く高等学校（以下「専門高校」という。）においては、社会の急激な変化に伴い、修得が期待される資質・能力も変わってきており、地域の持続的な成長を支える最先端の職業人育成を担っていくには、加速度的な変化の最前線にある地域の産業界で直接的に学ぶことができるよう、産業界と高等学校と一体となった、社会に開かれた教育課程の推進が重要である。
- 多くの開設科目から主体的な選択履修が可能であるという特徴を有する総合学科においては、自分とは異なる興味・関心を持つ生徒と共に多様な科目を履修することで、自らの進路を見つめ直しつつ、多様な分野に関する知識及び技能や異分野と協働する姿勢といった、これからの時代に求められる資質・能力を育成することが期待されている。
- 新しい時代を生きる子供たちに必要となる資質・能力をより一層確実に育むため、子供たちの基礎学力を保障してその才能を十分に伸ばし、また社会性等を育むことができるよう、学校教育の質を高めることが重要である。その際、様々な背景により多様な子供たちが、実態として学校教育の外に置かれることのないようにするべきである。
- 勤労青年のための教育機会を保障するために制度化された定時制・通信制課程は、現在では、不登校経験者、中途退学経験者、特別な支援を要する生徒、帰国生徒・外国人生徒等、多様な学習歴や動機を持ち、困難を抱える生徒の受け皿としての役割を果たしており、こうした多様な学習ニーズに応じ、特色のある教育活動をこれまで以上に実施することを考えた場合、現在の教育環境は十分なものとなっているか考える必要があるのではないか。

【協議会で出された主な意見】

《子どもたちの学習ニーズに応じた環境づくりについて》

- 外国にルーツのある子どもたちや特別な支援を必要とする子どもたちの学習支援については、伊賀地域全体で各校が担う役割を考えることが必要である。(R 1)
- ほぼ高校全入の時代にあって、特別な支援を必要とする子どもたちや外国にルーツのある子どもたちの中には、高校に進学するために地域外の学校を選択せざるえない状況がある。地域の高校に進学したい地域の子どもたちにとって望ましい学校の選択肢を用意し、カリキュラムを工夫することが大切である。(R 2・第1回)
- 数年前の協議会において昼間定時制について議論したが、当時は当地域にはニーズがないと結論づけられた。再び、中学校の現場において昼間定時制の必要性が高まっているということは、子どもたち自身や彼らを取りまく状況が大きく変化している可能性があり、改めて議論する必要がある。(R 2・第2回)
- この地域にも不登校傾向の子どもたちは増加しており、彼らの中には、週のうちの何日かの通学や、1日の中でも数時間登校するような就学形態を希望する子どもが多くいる。このような子どもたちの多くは、対人関係に不安を感じており、程よい人間関係の中だからこそ学習できたり、全日制高校と重ならない時間帯のほうが安心して通学できたりすることから、現在は、奈良県立山辺高校山添分校の昼間定時制や上野高校または名張高校の定時制に進学していることが多い。昼間定時制の高校が伊賀地域にあれば、域外へ通学することなく地元で力をつけて高校を卒業し地域社会に出ていくことができる。(R 2・第2回)
- 通学事情をふまえると現状の伊賀地域の県立高校の配置は適切であるといえる。今後の配置を検討する際も、通学の負担を考慮して考えてほしい。(R 2・第1回)
- 通学の事情や本人の学力によっては、複数の学校から進学先を選択できるような状況にない子どもたちもすでに存在する。高校に進学したい子どもたちが必ず進学できる環境づくりをしてほしい。(R 2・第2回)

《学校の規模と配置について》

- 一人の保護者としての個人的な意見としては、子どもたちが伊賀市と名張市を行き来することはあまりないように思うので、現在の5校を維持して欲しい。(H29・第1回)
- あけぼの学園高校は例外として、これまで4学級規模以下の学校は統合してきている。今後、子どもの教育を大切に考えると、5学級規模を下回ることはできない。(H29・第1回)
- 1学年4学級以下の学校規模では活性化が難しいという議論が以前にもあったが、そこに向かうような施策でよいのか。(R 1)
- 平成18年9月の協議会のまとめにおいて、平成27年度から平成33(令和3)年度の頃には、地域の県立高校は4校に統合されているイメージが出されていることをふまえ、今後4校に再編していく方向を具体的に議論すべきである。(R 1)
- 少なくとも、北部においては、現在の学科・コースを維持することが望ましい。伊賀

地域の県立高校数も現在の5校を保つべきである。(R 1)

- 教育の質や選択肢に差が生まれないようにすべきであるが、生徒減に伴って教職員数や学校数が減ることは避けられないことも事実であることから、より良い学習環境を検討するにあたっては、現実的な折り合いをどうつけるのかを意識しながら進めることが大切だ。(R 2・第2回)
- 学校規模が小さくなり教員定数が減少することで部活動の顧問の配置が今までどおり行えずに、廃部を検討せざるを得なくなる部が生まれることが懸念される。(R 2・第2回)
- 子どもたち一人ひとりが自分の特性に応じた学びができるよう、地域にいろいろな選択肢を置いておくことが大切である。当地域の高校はそれぞれに特色や魅力を持って教育活動を進めているので、できるだけ維持されることが望ましいが、やむを得ず再編が必要となれば、学びの選択肢をどう引き継ぎ整理していくのかを議論しなければならない。(R 2・第2回)
- 中学校長の聞き取りの内容をふまえると、伊賀、名張両市の状況や考え方は必ずしも一致していないように思う。両市それぞれにおいて、県立高校のあり方を検討してみてもよいのではないか。(R 2・第2回)
- 地域の県立高校は、地域に貢献する人材の育成、世界を視野に入れ活躍する人材の育成など、それぞれの役割を担って教育活動を進めており、これらの選択肢を少しでも多く維持するためには、伊賀、名張両市合わせた伊賀地域全体で県立高校のあり方を考えるべきである。(R 2・第2回)

3 活性化に向けた方策について

【中央教育審議会の意見より】

- 特色・魅力ある教育活動を展開するための方策として、地域社会や高等教育機関、企業等の関係機関と連携・協働することが求められる。もとより、子供たちの資質・能力は学校だけで育まれるものではないことから、一つの学校で全てを完結させるという「自前主義」から脱却し、学校内外の教育資源を最大限活用して、関係機関にも開かれた教育活動が行われる必要がある。
- ICTの活用や関係機関との連携を含め、現に学校教育に馴染めないでいる子供に対して実質的に学びの機会を保障していくとともに、離島、中山間地域等の地理的条件に関わらず、教育の質と機会均等を確保することが重要である。

【協議会で出された主な意見】

- あけぼの学園高校の生徒による中学校への出前授業など、高校生の生き生きとした姿が中学生の進路決定に結びついている。中学生にとって多様な選択肢が維持されるよう、今後もこれらの取組を続けてほしい。(H29・第2回)
- 名張青峰高校のICT機器を活用したアメリカの高校生との交流等は、グローバル化に対応したすばらしい取組となっている。国際交流活動を活発にするために海外留学の資金援助等が必要である。(H30・第2回)
- 学校と地域が連携した学習活動を促進するためには、学校と地域をつなぐコーディネーターが必要である。町づくりに関わる地域の人材がその役割を担うことができたらと思う。(H30・第2回)
- 県立高校が地域からさらに支持されるためには、中高の連携による取組の成果などについての情報発信を強化する必要がある。(H29・第2回)
- 在学する高校生が、自分の高校の魅力を伝えれば、中学生もより興味を持って聴くことができ、学校の魅力や楽しさが伝わると思う。(H30・第2回)
- 学校の活性化について、在校している生徒から意見を聞いてみるのもよいのではないか。(R2・第2回)
- 学校の魅力化が進み、行きたいと思う学びや部活動があれば、通学の利便性に関わらず子どもたちは目指すと思う。(R2・第2回)
- 地域の県立高校はそれぞれの特色を活かしながら学校の魅力化に取り組んでおり、伊賀白鳳高校には部活動に魅力を感じて他地域からも一定数の入学者がいる。子どもたちが地域の学校に通学しやすくなる環境整備が図られることで、学校の特色化・魅力化をより進めることができる。(R2・第2回)

第3回協議会において協議していただきたい論点

- 今後の中学校卒業生数の減少を見据えた伊賀地域の県立高等学校のあり方について

【論点】

伊賀地域の中学校卒業生数の推移予測によると今春（令和2年3月）から令和8年度末（令和9年3月）までの7年間で、伊賀南部ではほぼ増減がないものの、伊賀北部において110人程度の減少が予想される。こうしたなかで、伊賀地域の県立高校について、さまざまな子どもたちの進路希望や学習ニーズをふまえながら、学習環境をよりよいものとするため、どのような学習内容、規模と配置が望ましいか。

<協議の視点>

今後の学級減への対応として、現在の県立全日制を5校で維持するのか、4校に再編するのかといった意見が出されている。いずれの場合も、それぞれの県立高校がより役割を果たし特色や魅力を発揮できるか。

また、これらのことに合わせて、特別な支援を必要とする生徒、不登校の生徒など、幅広い学習ニーズを持つ生徒たちが地域外に進学せざるを得ないケースが増えているといった意見が出されている。地域の夜間定時制の果たす役割やあり方も含め、生徒減に応じた県立高校の規模と配置をふまえながらこれまでにない学校（昼間定時制等）を設置することにより、このことの解決につながられるか。また、設置することで考えられる利点や課題は何か。